

本日のイザヤ書はバビロン捕囚の末期に活動した「第二イザヤ」と呼ばれる無名の預言者による預言（40章から55章）の冒頭部分です。特に40章1〜11節は、この預言者の召命の記事で、天上の会議で天使たちが互いに言葉を交わしている設定になっています。

神はここでイスラエルの民を「わたしの民」と呼び、ご自分を「あなたたちの神」と言い表して、我々汝の信頼関係を築いています。このような親密な信頼関係にある神が、『わたしの民を慰める』と語るのです。2節後半によると、『罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた』と、イスラエルの罪に対して倍返し
の報い（＝恵み）を約束しています。

バビロン捕囚という「苦役」の期間が満ちて、イスラエルの民は十分に贖いを果たしたので、その罪が赦されたことを宣言しています。祖国ユダヤから引き離され、自分の土地・家を奪われ、精神的な支えであるエルサレム神殿からも遠く離れ、異国の地で苦難の歩みをしてきた民に対して、第二イザヤはまず「慰めよ、慰めよ」と語りかけています。「慰める」（ナーハム）という語は苦しみや痛みを共に感じ取るという意味の言葉です。第二イザヤは、神は捕囚の地で苦しむ者の痛みと共に感じ取ることを通して、解放へと導く方であると確信しているのです。

預言者は召命を受けるときにしばしば神や天使の声を聞くのですが、1〜2節をみると、一人の天使が他の天使に捕囚からの解放を告げています。希望に満ちた力強い預言の言葉です。天使はまず『慰めよ』と語りかけています。捕囚という60年に及ぶ苦役の期間は終わりを迎えるというのです。

捕囚の地で信仰をはぎ取られて、荒野野そのものになってしまった自分たちの間を主が歩まれるという宣言として、この言葉を受け取ったと思います。ところが、小さく貧しくされた神の民の中にも他人を見下す「丘」があり、卑屈に身を屈める「谷」がありました。捕囚民の中の卑屈さを象徴する「谷」に向かって「身を起こせ」と天使は呼びかけているのです。

どんなに悲惨な状態にあっても、自ら立ち上がる力が神の民には与えられている！というのです。それはなぜか。慰め主である神がその苦しみや悲しみを担ってくださる方だからです。『主のために、荒野野に道を備えよ。…谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ』とは、抑圧されて卑しめられている捕囚

民に対して自ら身を起こせと促す励ましの言葉です。

また、神は、弱者を虐げ搾取する側に立つ者に対して、身を低くして豊かさを分かち合うことを求め、すべての人が神の子としての尊厳を持つことができるように神が導くというのです。それこそが『主の栄光を現わす』ことなのです。確かに経済的な発展や科学技術の進歩は、人間を豊かにします。けれども、豊かさを追求する人々がいると、一方で逆に貧しさを生み出してしまいます。豊かさを求める人々がいると、逆に病気や体の不自由さを持つている者や弱い者たちは取り残され、社会的な分断は人種や民族の違いを際立たせることになりがちで、「主の栄光を現わす」こととは逆の状況を作り出してしまいます。真の「栄光」とは、すべての「肉なる者」（＝人間）が神の栄光を「共に見る」ことで達成されるものなのです。

天使はこの世のはかなさを伝えます。この世は常に移り変わるのですが、そのことを『草は枯れ、花はしぼむ』（7節）と表現し、全く逆に、『神の言はとこしえに立つ』（8節）と、神の言葉の不変性を語るのです。この場合の「神の言」とは、神が苦難にある者を慰め、励まし、生きる力を与える言葉のことです。バビロン捕囚の地にあつて、民たちは全知全能の神は無力であると思いました。けれども、第二イザヤによれば、ヤハウェが苦難の中にある信仰者の痛みを共に感じて救いの御手を差し伸べてくださり、慰めてくださる方であることを知ったのです。

神は無力な方ではなく、苦難の中にある信仰者を必ず助ける慰めに満ちた方である。神がそういう方である以上、自分たちも積極的に隣人の痛みと共に感ずる力を養って、隣人愛を実践する人間になろうと考えるようになったのです。隣人の苦難を担う倫理的な責任性を抱く人間こそがヤハウェに信頼する信仰者としての務めだと考え、この信仰的な成熟がローマ帝国で迫害を受けたキリスト教に受け継がれていったのです。つまり、神が創造した世界に責任的に関わる生き方を選択することが、神の意志に気づくことであると知ったのです。人間世界で起こる不条理なことに対して、人間の一人として自分にも責任があるという立場に立つことで初めて、神の意志が見えてくるのです。そのとき、苦難の中にある者に慰めの言葉かける神の言がとこしえに立っていることを知ることになるのです。

御子イエスのご降誕を待ち望むアドヴェントの期間を過している私たちにとって、第二イザヤが見出した神の慰めを実現して下さるのは、イエス・キリスト以外にはいないのです。

この御子イエスのご降誕こそが、神が私たち信仰者に責任的に関わって、それぞれの苦難を救おうとする神の意志の現われなのです。